

持続可能な地球と私たちのために  
—文化としての農業・文明としての食料—

龍谷大学教授・農学部設立準備委員長  
京都大学名誉教授 末原 達郎

# 今、何が問題か？

- われわれは、食料のことを考えなさすぎる。
- 食料は、ふって、わいて出てくるものではない。
- 特に、農業（農耕）はそういうものである。
- 時代の変わり目に、食料のことを、今更、考えてみる。
- どうも、国は考えていないようだ。

# 人間にとって食料とは何か、という視点

- 国家が考えないのならば、われわれが考える。
- 自分たちにとって、食料とは何か？
- どういう食料であってほしいのか？

## 人間にとって食料とは何か

- ①自分という視点
- ②家族という視点
- ③地域社会という視点
- ④国家という視点 ⇒ わたしは、国家ではなく、文明という視点
- ⑤人類という視点 ⇒ 人類学の視点 ゴリラやチンパンジーとも比較  
人類は動物の一種である

# ① 個人にとって食料とは何か

- 自分という視点
- 食べなければ生きていけない  
    フィールドでの経験から 一日3食を1食にするのはたいへん。
- 飢餓の世代は覚えていても、飽食の世代は判らない
- 食物は、一日なくてもひもじく、三日なければ生死をさまよう。
- 自分にとって食料があるかないかが、重要。
- 国民平均の摂取カロリーが何千キロカロリーか、そんなことは無関係。
- 生きるか、死ぬか。今日生きるか、明日生きるかの問題。
- 抽象的ではなく、たいへん具体的。 仕送り間際の下宿学生。

# 自分たちの問題として、考えてみる

- 最近の学生の多数派は、食事にお金をかけない。
- 1食300円で食べる。毎年食費の額は減少し続けている。
- 月額24000円
- それでも、飲み会にはお金をかけるし、化粧品にはもっとかける。
  
- 一方で、グルメ学生の登場
- イタリアン、フレンチ、中華、タイ、ベトナム、韓国、最後に和食。
- あまりにも、インターナショナル。
  
- ピンチになったら、どうするか？

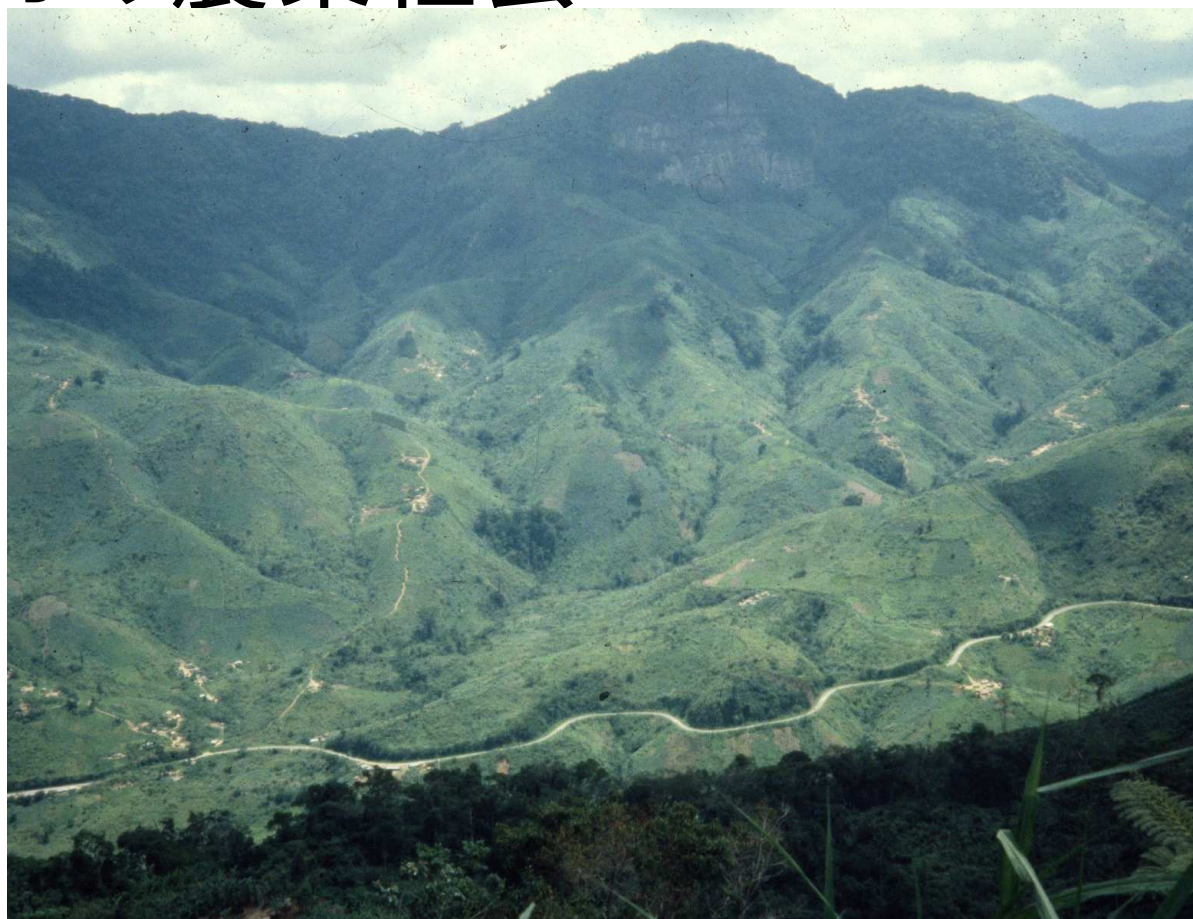
## ② 家族という視点

- 食にとって、大事なものは、自分と家族、その延長線上の少数。
- 家族が飢えていたら、なんとかしようとする。お金をとらない。
- 子供の食の安全に関しては、親は考える。
- 安全なものを食べさせたい。病気にさせたくない。
- 母親になると特に、そういう意識が高まる。 ⇒ 残留農薬、食品の安全性
- ちゃんと(した)食事を食べさせたい。

### ③ 地域社会としての視点

- 日本では、あんまり考えていなかったこと。
- アフリカでは、重要。
- コンゴのムニャンジロ村で、農村調査を開始した。
- 焼畑農業の村。山の斜面を焼いて、畑にして、耕地を造る。
- キャッサバ、インゲン豆、トウモロコシ、ヤムイモ、バナナを栽培。
- 食餌ができるかどうかは、とても重要なこと。
- 最初、4か月間、次に8か月間、次に6か月間と村に滞在。
- 首長に会って、滞在を決める。食事と薪と水は、地域社会が補給してくれた。
- 後に、キャッサバ粉と水と薪を、村で購入しようとしたが、ダメ。
- なぜか？ 家族の延長線上に、地域社会がある。

# アフリカの農業社会





# ムニャンジロ村











# 市場 定期市一場所と時間が設定











# 売れるものと 売れないもの

- 売れるもの 市場で売る 市場 定期市で時間と場所が限定
  - 売れないもの 食事、水、薪
  - 分け与えてくれるもの
  - 分配もしくは贈与されるもの 村では商品ではない
  - kuusa と kuula 混乱が見られる。
- 
- 定期市の場 食事も商品になる。市場交換。
  - 地域社会の外側から来たものが、商品として販売される。
  - ムニャンジロ村の住民は、農作物を定期市の場で売って、そこで商品を購入する。

# ムニャンジロ村で生きるとはどういうことか。

食事を得るためには、畑を造らなければならない。

- 畑を借りれるかどうか、大問題。
- ふつうは、土地が余っていれば借りることができる。
- 首長(ムワミ)の承認、一族の長(エナヌ)への分配。
- 一族のメンバーになることによって、土地を利用できる権利を得る。
- アマルティア・センが言うように、「飢餓とは、食料がそこにあるかどうかの問題ではない。食料に、アクセスできるかどうか」が問題だ。
- それは、真実。食料があっても飢餓や食料不足は起きる。

# 土地の利用と一族 (lineage:*luhu*)



# 土地と労働



# 農耕民社会で生き残る方法

- 食料にアクセスできるかどうか。
- 農耕民の社会では、土地にアクセスできるかどうか。
- 土地を耕す権利があるかどうか。
- 紛争が起きると生命の維持を目的に、人々は土地を離れ、移動する。
- 新しい土地で、そこでの土地を耕す権利があるかどうか、食料にアクセスできる権利となる。紛争も起きる。
- 他者はどうやって、その土地を利用することができるのか？

# 食料不足で何が起きるか？

## —都市と食料—

- 1990年から1991年、コンゴの都市にいた。食料不足で、食料価格が高騰。ザール通貨の暴落。モラトリアムが起きる。
- 都市では食料不足が限界に達し、食料問屋の打ちこわし。キャッサバ倉庫の打ちこわしへ発展。
- ここから、「現物経済」への復帰が起きる。
- 日本も戦争前後は、現物経済になった？
- ヤギ、ウシ、トウモロコシ、キャッサバ粉が貨幣の単位、交換の媒体に。
- 経済人類学的には面白い現象。多層化された目的別貨幣が、全目的貨幣へと一元化していくのが、市場経済の論理であり、発展形態であるとした、ピエール・ボハナンの理論に反する事態。
- 結果、ザールは崩壊。国家消滅。内戦へ。国家は消滅することがある。

# 食料をどうするのか？

- 都市民にとってこそ、食料は重要。
  - 待っているだけで、提供されるものではない。
  - 食料は作らなければならない。どうやって、どのようなものを作るか
- 
- 現実の都市民
  - スーパーマーケットかコンビニの前で、立ち尽くす。
  - 得られる情報は、高いか安いかだけ。時々原産地表記、トレーサビリティがある。
  - TPPで、それも怪しくなる。
  - 消費者は、自由な選択を与えられているようで、自由な判断の材料すら与えられていない。
  - 発言者は、農民でも消費者でもない。



# もっとも重要なのは

- 消費者と生産者とのラインを結ぶこと。
- どうやって、ほんとうに必要なものを選ぶかを考えること。そのための方策を作り上げること。
- 昔は、生産者がすぐそばにいた。加茂の振り売りのおばさんが、週に何回か町に農産物を運んできていた。
- face to face の関係。旬を知る機会。品種の違いや料理の違い。
- 今は、どこから来たのかさえ、わからない。
- 聖護院蕪や聖護院大根はどこからきているの？
- トウモロコシはどこから。カボチャはどこから。

# 日本は世界から買いつける⇒世界に影響を与える

- 関係性が見えない。見えにくい。
- カボチャの旬は、6月から9月。
- 冬のカボチャはどこから？ トンガやニュージーランド
  
- 結びつきを意識する。
- 生産者は、日本の生産者も世界の生産者もいる。
- 日本での消費は、日本の生産者だけではなくて、世界の生産者に影響を与えている。トンガの人はタロイモを作らずにカボチャを作っている。
- 現在では、このフード・チェーンはお金の連鎖関係としてのみ現れている。

# 日本文明の現状、農業について

- 日本農業は見えにくい
- 消費者と生産者の距離が遠い、見えにくい。
- 不可視の構造
- 生産者と消費者の間に長いチェーンがあるから。
  
- 農業をすべて、市場に任せることができるか？
- 市場は、効率的で合理的な分配手段だが、機能不全に陥ることがある。
- 市場は、平和が約束された時に成立。破壊されれば不成立。
- 商品が存在しないとき、貨幣の信用がないとき不成立。
- しかし、人間は生きていかなければならない。
- たとえ、国家がつぶれようと。 国家⇒文明

## ⑤国の視点 —日本の農業—

- 国家の視点
  - 自給率の維持
  - 米作一辺倒
  - 農業経営の効率化⇒経営規模の拡大
- 
- 日本の農家は小規模自作農家
  - 農業労働者ではない。大規模地主がいない。
  - 小規模で、自給を基本とした家族農業
  - 戦後の農地改革で成立

# 日本の農業に何が起こっているのか

## 農家数の変化

	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013
総農家数	6057	5665	5342	4953	4661	4376	3835	3444	3120	2845	2528	
販売農家						3315	2972	2651	2337	1963	1631	1455
専業農家	2078	1219	831	616	623	498	473	428	426	443	451	415
第1種兼業	2038	2081	1802	1259	1002	775	521	498	350	308	225	205
第2種兼業	1942	2365	2709	3078	3036	2975	1977	1725	1561	1212	955	834

販売農家: 経営耕地面積が30アール以上、または農産物販売価格が50万円以上の農家  
 自給的農家: 以下の農家  
 農家: 経営耕地面積が10アール以上の農業を営む世帯または農産物販売価格が15万円以上ある世帯  
 1990年世界農林業センサス以降

# 農家人口、農業就業人口、65歲以上

	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013
農家人口	34,411	30,083	26,282	23,197	21,366	15,633	13,878	12,037	10,465	8,370	6,503	5,624
農業就業人口	14,542	11,514	10,252	7,907	6,973	5,428	4,819	4,140	3,891	3,353	2,606	2,390
65歲以上			1,823	1,660	1,711	1,443	1,597	1,800	2,058	1,951	1,605	1,478
65歲以上 %			17.8	21.0	14.5	26.6	33.1	43.5	52.9	58.2	61.6	61.8

# 経営耕地面積の変化

	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013
農家の経営耕地面積	0.88	0.91	0.95	0.97	1.01	1.05	1.14	1.20	1.25	1.27	1.33	
販売農家								1.50	1.60	1.76	1.96	2.12

販売農家：経営耕地面積が30アール以上、または農産物販売価格が50万円以上の農家  
自給的農家

農家：経営耕地面積が10アール以上の農業を営む世帯または農産物販売価格が15万円以上ある世帯  
1990年世界農林業センサス以降

経営耕地面積は、ほとんど変化していない。  
農水省は、経営面積の拡大をめざした50年であった。

# 農業所得・農家所得の変化

	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013
農業所得 (千円)	219.2	365.2	508.0	1246.0	952.3	1065.5	1430.3	1442.1	1084.2			
										1235	1223	1347
農家所得	442.9	835.1	1591.9	3960.7	5593.8	6915.9	8819.1	8916.5	8279.8			
農外所得										2239	1610	1553
	49.5%	43.7	31.9	28.9	17.0	15.4	16.2	16.2	13.1	24.6	26.2	28.3



# コメの生産費

	生産費 (10a)	物財費	肥料費	農業薬 剤費	高熱動 力費	賃借料	自動 車・農 機具費	労働費	家族労 働費	支払利 子	支払地 代
2012	140,957	85,455	9,339	7,530	4,556	11,872	32,035	36,279	34,151	331	4,985
	作付面 積 (a)	収量 10aあ たり	投下労 働時間	所得 (10a)	全算入 生産費						
	146.9	529kg	25.8	36,453	15,957						

# 現状の認識から未来へ

- 農家数は減少している。
- 経営面積はあまり増えていない。
- 農業者は年を取ってきている。
- 日本全体が人口減少にある。
  
- コメの経営はもうからない。(か?)
  
- 玄米60kg 16,650円(全銘柄平均、平成24年)
- コメ10a 529kg 14,679円－14,096円＝583円 ⇒ 50000円
- 1.5ha ⇒ 8745円 ⇒ 750000円
- 10ha ⇒ 7、500,000円
- 農業の市場化と、農地の規模拡大だけで、問題は解決するか？

# 国家とは異なる視点

- 文明としての食料
  - 日本文明は食料をどう考えるのか？
  - 日本の食料、世界の食料
- 文化としての農業
  - 「和食」文化がユネスコの無形文化遺産に登録
  - 日本の農業文化をどう支えるか？
  - 米と野菜、魚 だし 昆布とかつお
  - 水田稲作と畑作野菜 畜産 牛乳 牛肉、豚肉、鶏肉

# 文化としての農業 ⇔ 経済としての農業

- 自然環境と人間活動の合体 から生まれる 農業
- 生態環境 歴史 人の移動 農作物の導入
- 農作物の体系 輪作、土壌の劣化を防止 +(たす)思想
- 化学肥料を+
- 灌漑農業の歴史 畑作農業の歴史 循環の思想
- 牧畜の欠落
- 食生活の歴史 明治よりも戦後の変化の方が大きい
- 栄養の思想 +思想

# 文化としての農業は保持されるのか

- 日本文化の中に、外来文化を取り入れ、自分のものにする
- ころころと変わる食文化 「和食」ユネスコの無形文化
- 家族の味が、継承されない。
- 母親の食文化の崩壊？ 離乳食も販売物を購入
  
- 食文化と農業文化は結びつく
- 文化は醸成されるもの
- 味を知る 知識 五感を用いて 学ぶ